

WINE AS A CULTURAL PURSUIT,
WINE AS A BUSINESS STRATEGY

エグゼクティブはなぜ ワインにはまるのか？

今野有子
Konno Yuko

はじめに

本書を読み進めるかを決める、3つの質問

本題に入る前に、まずは次の3つの質問に、心の中で答えてみてください。

正解を当てるためのテストではありません。あなたの中にある思考の癖を知るための問いです。

【Q1】 成功者が1本100万円のワインを開けるとき、求めているものの正体は？

A 社会的ステータス

B 最高に美味しいという確実性

C 開けてみるまでわからない不確実性

【Q2】 世界最高峰と称されるブルゴーニュのワイン。その収穫を支えているのは？

A 代々その土地を守る、フランス人農家

B 最新技術を搭載した収穫ロボット

C 低賃金の季節労働者

【Q3】「高いワインは美味しいに違いない」と思ってしまうのは、なぜ？

A 価格には品質を裏付ける根拠があるから

B 専門家や権威が高く評価しているから

C 価格が「自分の判断の代わり」をしてくれるから

——いかがでしょうか。

これらは私が長年考えてきた問いです。もし答えに迷ったとしても大丈夫。あなたはまだ、ラベルの表側を見ているだけです。

エグゼクティブとは、そのラベルの裏側を読める人間です。

本書を最後まで読み終えたとき、あなたは同じ問いに、自分だけの答えを持てるようになっ

ています。

本書はワインの本ではない

これはワインの本ではありません。あなたの思考の話です。

本書が扱うのは、葡萄品種や格付け、当たり年などの一般的なワインの知識ではありません。それらは、いまや誰でも検索できる「情報」です。

知識が瞬時に手に入り、誰でも「正解」にアクセスできるようになった今の時代、ただ情報を暗記することには何の価値もありません。それどころか、ネットで拾った誰かの言葉を自分の意見のように語るだけでは、思考の主導権を他者に渡しているのと同じです。

私たちを苦しめるのは、知識の欠如ではなく、別のものです。正解があるはずだ、と信じてなくなる癖。そして、正解が見えないときに、誰かの評価に寄りかかってしまう癖です。

あなたは、他人の評価に振り回されていませんか？

会食でワインを選ぶとき、内心焦っていませんか？

「間違えたくない」と思った瞬間、あなたは知らず知らず他人に評価される側に立って

ます。

人生は、評価される側に立つか、価値を定義する側に立つかの選択です。

この本で私が伝えたいことは、ワインを通して見える、エグゼクティブと呼ばれる人たちの思考の根幹です。

ここで言う「エグゼクティブ」とは、年収や肩書きではありません。他人が用意した「正解」をなぞる側ではなく、自分の判断で価値を定義し続ける人のことです。

ワインは、飲み手の思考構造を容赦なく映し出す液体です。なぜなら、ワインには「絶対の正解」がないからです。

重要なのは、自分はこの一杯をどう感じ、どう意味づけしたのか。それを、自分の言葉で語れるかどうか。これが「エグゼクティブの世界」への入口になります。

ワインは、わからない

私は17年間、ワインビジネスの最前線に身を置いてきました。

フランス、イタリア、スペイン、スイス、ルクセンブルクなど様々なワイン産地を訪問

し、高品質でまだ知られていないワインを探し出し、日本に輸入してきました。
ワイナリーとの交渉も、書類仕事も、全部自分でやり抜いてきました。

輸入したワインをホテルや高級レストランに卸し、ネットで小売するだけでは、他の輸入業者との差別化が難しい。

そのため、ファイナルファンタジー30周年記念ワインをはじめ、NTTドコモ、関西電力グループ、東急不動産、ヤマハなど多くの大企業や大使館とコラボレーションし、独自の市場を開拓しました。

しかし、ビジネスが軌道に乗るほど、ある疑問が大きくなりました。

——私は本当にワインを理解しているのか。

一生懸命勉強し、ワインの知識を詰め込みました。世界中のワイナリーを訪ね、自分の足で畑を歩き回り生産者に話を聞きました。

しかし、ブラインドテイスティングで品種や産地を当てられるようになっても、それはワインの本質ではありません。「本当のところはワインを何も知らないのではないか」と、自分自身を疑うようになっていきました。

私は幼い娘たちを連れて渡仏し、ブルゴーニュのワイナリーに住み込み、無給で働きました。そこで見たのは、雑誌で特集されるきらびやかな世界ではありません。高級ワインの背後にある、静かで現実的な構造でした。そして、最後に出した結論はひとつ。

ワインは、わからない。

作り手でさえ、自然を完全に支配することはできない。開けるまでわからない。同じボトルでも、同じ味にはならない。飲む人の状態によっても変わる。

つまり、「絶対の正解」が存在しないのです。

だからこそ、自分の感じ方、思考、世界の見え方が、ワインに投影されます。

なぜ成功者はワインに惹かれるのか

私は2021年に渡米し、シリコンバレーを拠点に哲学ビジネスを立ち上げながら、グローバルなエグゼクティブとの交流を通じて、彼らがどのようにワインと向き合っているのかをつぶさに観察してきました。ここはGoogleやApple、スタンフォードという世界

の知性が集結するだけでなく、野生動物が生息する豊かな自然があります。また、日本では知られていないワイナリーが集まるワイン産地でもあります。

彼らとのワイン会に参加してみると、ワインを通して、自分の判断軸を試していることがわかります。

「有子。このワイン、どう思う？」

私の評価や、私が知っているであろう市場での評価を気にしているのではなく、他者の感性を知りたいという好奇心からの質問です。その上で、「自分はこう感じるんだよ」と。他者の感性と自分の感性を照らし合わせ、その違いを楽しんでいるのです。

ワインは不確実です。

高額でも、期待外れに終わることはありません。どれだけ権力や富があっても、味わいを支配することはできません。この「ままならなさ」「不可知性」こそが、日々、正解のない決断を迫られる人間を惹きつけるのです。彼らは、ワインを通して不確実性と向き合う訓練をしています。

ワインナリーを買うのはなぜか？

ワインナリー所有を人生のゴールのひとつにしている成功者は大勢います。

なぜ、論理と効率を極めた彼らが、「ワイン」という不確実な世界に数億、数十億という私財を投じるのでしょうか。それは、ワインは「時間」を味わう装置だからです。

熟成は、急げない。未来の価値を、いま信じるしかない。それは投資であり、哲学であり、エグゼクティブの生き方そのものです。

本書は、ワインの教科書ではありません。

価値が不確かな世界で、どうすれば他者の評価に振り回されることなく、自分の判断軸を持ち続けられるのか？ その問いを、ワインという最も残酷で、正直なレンズを通して一緒に考えていきたいと思っています。

この本を通じて、世界のエグゼクティブの頭の中、彼らが何を見て何を感じているのかを理解し、彼らの一員になる手助けができればと願っています。

もしあなたが、誰かの作ったゲームから抜け出し、自分の舌でこの不条理な世界を味わ

いたいと願うなら、ぜひこの先へ進んでください。

読み終えたとき、あなたはきっと

- 「正解がない場面」でも、自分の感性と判断軸を信頼できる
 - 他人の評価に寄りかからず、自ら価値を定義できる
 - 不確実性を恐れるのではなく、そこに意味を見出せる
- ようになっていくはずです。

この本に書かれている「ワイン」は、あなたを心地よく酔わせるための液体ではありません。あなたの知性を研ぎ澄ますための、静かで強力な劇薬です。

その一杯を、あなたは飲みますか？

はじめに

3

第 1 章

知性の格付け

——なぜ、100万円のワインを開けても遠ざけられるのか？

落第

22

思考停止の構造

26

ワインはあなたの判断軸を示す

29

ワインは判断軸の鏡

32

正解がない世界

33

第 2 章

エグゼクティブとは何者か？

—— 借り物の正解を、手放すために

評価

エグゼクティブとは、何者か？ —— 価値を定義し、完遂する者

エグゼクティブとは「金持ち」のことではない

評価は、思考を奪う

評価への依存

評価は「作られる」ことがある

価値は「与えられる」ものではなく、

自ら「定義」するもの

エグゼクティブという生き方

第 3 章

ワインは推論のゲーム

——限られた手札で、世界を読む

沈黙

仕事は、推論

先入観を除くという訓練

ワインは思考のトレーニング

2%のノイズ

「問う」という勇氣

第 4 章

ワインの不都合な真実

——ワインの幻想を解体する

洞窟

第 5 章

エグゼクティブの美学

〔実践編〕

ファーストクラス

なぜ、一丁経営者は落第したのか

エグゼクティブの美学

〔実践〕 今日から始める5つの行動

「高級ワイン」とはなにか？

“恥辱の事件” —— 「収穫の間」

「情熱」 —— 産業を支える無償資源

「正解」の変化

「異端」の台頭

第 6 章

グローバル基準の

「成熟」と「気遣い」

〔実践編〕

フルコース

何が起こっていたのか

選択に介入する

なぜ私たちは揃えなくなるのか

境界を越えると、なぜ安心するのか

領域に侵入する

余白を雑に扱う

「実践」グローバルで信頼を失わない6つの行動原則

また会いたいと思われる人

第
7
章

ワインを選ぶ技術

〔実践編〕

孤独な島

なぜ、私たちはワインを「知識」で語ってしまうのか

「西洋文化の象徴」という呪縛

主體的に味わう

「偏差値」からの卒業

「Why」と「ナラティブ」を使いこなすには

〔実践〕 今日から始める「ワインを選ぶ技術」

第 8 章

エグゼクティブな身体

〔実践編〕

静寂

なぜ、ワインに「身体」が重要なのか

美徳がノイズに変わる瞬間

「不動」は格上を表すボディランゲージ

「実践」今日から始める「エグゼクティブな身体」

終 章

なぜ成功者は

ワイナリーを欲しがるのか

受容

頂点を極めた者たちが向かう「究極の自己表現」	256
「ままならなさ」という名の快樂	258
土へと還る	260
文化の守護者「パトロネージ」	261
水平のリスペクト	264
エグゼクティブが切望するもの	267
「やり直し」のきかない、一年に一度の真剣勝負	271
究極の贅沢とは、「増やせないもの」	273
人生の所有権を取り戻す	276
「いつか」という名の幻想	278
究極の自己表現	279
エグゼクティブとして生きる	280
おわりに	284

